

---

# すべてが初めてだった。。

日生 陽

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

すべてが初めてだった。

### 【Zコード】

Z2156A

### 【作者名】

日生 陽

### 【あらすじ】

桜坂千衣は母親と二人暮らしの高校1年生の少女だった。しかし、幸せに暮らしていた千衣に突然の不幸が襲いかかる。母親の死だつた。そこに一人の青年がやってきてこう言つた。「俺は君のパパだ」死んだはずの父親がやってきた? 一体どういふこと? ! 千衣のめぐるめぐる日々の始まりだった・・・。

## 初めての出会い

### 【第一部】

私はこんなことが起こるなんて想像していなかった。

一緒に笑つた。

相談もした。

そして・・・知つた。

いまさら言われても困るの、、私はあなたを許せなくなってしまつた。

そう、すべてがはじめてだったの・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

お母さんが死んだ。

連絡をもらつたのはケーキを買って家に着いた直後だつた。

ケータイを持つ手の平に汗が滲む。

イタズラ電話かと思い、電話を切つた。

（　）

鳴つた、

お母さんが大好きだつた「さくら」だつた。

お母さんからの着メロだつた。

一度目の着信だつた。

「もつ、お母さんってば驚かさないでよ・・・」

私の声はかすかに震えていた。

「さくら」は鳴り続いている・・・。  
「さくら」は鳴り続いている・・・。  
「さくら」は鳴り続いている・・・。

心を落ち着かせて私は次の言葉を用意し、ケータイに出た。

「もしもし？お母さん？もう、悪ふざけはやめてよね。本気にしてよ。本気にしてよ。」

「本気だよ」

男の人の声がした。

「いたずら電話でもなんでもない。これは現実なんだ、証拠に俺が君のお母さんの携帯から電話している。早く来てほしい。病院だ。」

私は返事が出来なかつた。数秒の沈黙がながれる。

「おい？聞いているのか？気持ちは分かるが、君は祥子さんの唯一の肉親だろう？！」  
祥子さん・・・？

あ、

お母さんの名前だ。とにかく、イタズラ電話だとしても相手を確かめないと・・・。

私は小さく返事をしてケータイの電源を切つた。

財布と鍵をにぎりしめ、玄関を飛び出した・・・・  
もちろん、保険証も忘れなかつた。

タクシーに乗り、病院に着いた。  
玄関には男の人立つていた。

ケータイを持つていた。

「君が桜坂千衣だね？」

何の疑いも無く、彼は私に話しかけてきた。

私は小さくつづく。

「来なさい」

私はただ、彼に着いて行つた。

エレベーターが地下へと向かう。

気づいた時、私の目に“靈安室”という文字が書かれた表札が写つた。

嘘だ・・・・・。違う、この人、道間違えたんだ。

迷つたんだね、早くお母さんの所に行かなくちゃ、急がないと、ドアが開かれた。

男の人が私に白い布をめくれと言つてこる。

私は白い布をめくつた。

お母さんだった・・・。

悪い夢なら早く覚めてほしい。私は漫画のようにホッペをつけた。

痛かった・・・。すごく痛かった。

涙が止まらなかつた。

お母さんは私の唯一の肉親だった。お父さんは私が赤ちゃんの頃に死んだとお母さんから聞いた。お母さんとお父さんは駆け落ちしたらしく、両方とも家から勘当されたらしい。

私は寂しくなんてなかつた。お母さんがいたから。でも、そのお母さんがいなくなつた。

ひとりぼっちになつてしまつた。

ねえ、どうして私をおいてしまつたの？  
誰か教えて・・・・。

ひとつは寂しいの。

「君、大丈夫か？」

「誰？」

「家まで送る。君の家はどこなんだ？」  
やさしい声だ。

まるでお父さんみたい。覚えてないけど。

彼はしゃべり続けた。

「もし、よければ俺と暮らさないか？」

・・・・はい？

「君の肉親は祥子さんだけだったはずだ。なら、これから色々と大  
変だろうし。」

なんで、知ってるの？

「今日、俺の家に泊まつてよく考えてくれ。」

泊まる・・・・私が？

「じゃあ、パンを食べて帰る。」

私は重い口を開いた。

「あの、あなた誰ですか？」

私の隣に座る、見た目21歳の男はこう言った。

・

「ああ、俺か？君のパパだよ。」



## 初めての会話

私の隣には見た目21歳の男が座っている。この男はいきなりこんなことを言つてきた。

「俺？君のパパだ。」

私はこの言葉を聞いた瞬間、気が遠のくのを感じた……。

バタツ！！

「お、おい！大丈夫か？！おーい……

私は上から聞こえる透き通るよつたハスキーボイスに耳を傾けながら、混沌の闇に身をゆだねた。

叫び声が聞こえる。

「もう、お母さんなんか知らない！いい加減にしてよ！私、再婚なんて認めないから！！」

私の声だ。そうだ、急にお母さんが私に再婚するとか言い出した……。その頃はお母さんの言つたことが理解できなくて、泣きながら叫んでたつて。子どもみたいに。

そしたらお母さん、すぐ困つてた……で、それからお母さんは私と一言も交わさずに会社に行つちゃつた。なんだか、悪い気がして今日来るつて言つてた再婚相手のためにケーキを買ってきただっけ。

あたし、お母さんとケンカしたままだ。

お母さん。『めんね、ごめんね……。

頬に冷たい水滴が流れ落ちた。

目を開けると、そこには真っ白な天井があつた。とても明るい。

「うーん。」

とりあえず、伸びをした。

なんだ、全部夢だつたのね。あはは。

ガチヤ

あ  
起きたのか?」

ドアには黒髪で、直毛、鋭くもやわらかい一重の瞳、鼻梁の通つた  
鼻、足なんてこれ見よがしに長い。

声はもちろんハスキーボイス。

はあゝ世の中にはこんな人が

「ん? どうした?

その人は私に笑いながらそう言つた。

笑顔もすてきだあ。。

ん? ちょっと待てよ・・・なんで私の部屋に男の人がいるの?

あれ？？

行動が脳に追いついた時、私はギャラドス級の叫び声をあげていた。  
「あ、あなた誰ですか？！どうして、私の部屋に勝手に入ってるんですか？！一体何がどうなつて？？？！」

「まあまあ、落ち着いて。いいよね、俺の家。」

へえり この人の家かあ なん問題なしね

Why?

「あの・・・どうして私はここにいるんだでしょうか？」

「ああ、君が病院で急に倒れるから、家に帰そうにも場所がわからなくてね。で、仕方ないから、俺の家に連れてきたってわけ。どうナゾは解けた?」

・・・つまり、私が知らない男の人と一緒にしちゃつたわけ？！

ガーン・ビッシュ。そのままじゃ、お母さんに顔向けできな・・・あ。

そつか。お母さんもういないんだ。

「朝ご飯用意したから、食べろよ?」

その人はそう言って、やさしく頭をなでてくれた。  
まるで、心が読まれてるみたいだ。

「あ、もう一つの質問に答えてなかつたな。俺は何度も言つようだけど、君のパパだよ。」

「・・・すませんが、おいくつですか?」

「ああ。21歳だよ。」

この人は、それがさも当たり前かのように答えた。

ドスンッ

私は驚いたあまり、ベッドから落ちてしまった。

「大丈夫か?」

この人が私の“パパ”？ってことは、5歳で私を生んだの？！

「ああ、言い忘れてたけど、俺、実父じやなくて義理父だから。」

・・・つまり、この人！お母さんの再婚相手～～～？！

「あ。そうそう、面倒だったから、引越し屋さんに頼んで、荷物全部こっちに持つてもらつたから。これからはパパと二人暮しなな、ちい」

“パパ”はやけに嬉しそうだった。

私が、さくらざか 桜坂千衣は今日から歳の差5歳の“パパ”と一緒に暮らすことになりました。はてさて、どんな日々が待っているのやら・・・。

## パパは紳士

仕方なく、家に帰ることもないまま3日が経つた。学校は3日間休むことにした。つまり、私は今この人と同居中である。

この人っていうのは、私の“パパ”的ことだ（いかにも疑わしい）、  
名前：一瀬 明雪いちのせ あきゆき 本名かどうかわからない。

年齢：21歳

性格：優しくて紳士的 とてもパパには思えない

容姿：キアヌ・リーブスも恐れをなす美貌

好きな食べ物：コーヒー牛乳プリン

これが、私の知ってる“パパ”情報だ。勿論、この3日間で入手した。

そして今、新たな情報が“パパ”プロフィールに刻まれようとしている・・・。

「おはよう、ちい。今日から学校だが、大丈夫か？」

朝食の最中、朝から100万ボルトの笑顔を向けながら“パパ”は聞いてきた。

まあ、父親っぽい発言といえばそれまでなのだが、なんだか違和感がある。

今まで父親がいなかつたせいだろう。

「あ、はい。大丈夫です・・・。こちらこそ、仕事を3日間も休んで頂いて申し訳ないです。」

「アハハ。そんなに固くならなくてもいいよ。親子なんだし、これからもその口調じゃ疲れるでしょ？」

「あ、これからもやつぱ一緒に住むんだあ・・・。なんか、微妙な心境だ。

最近は親が離婚してもカツコイイ“パパ”なら許せるっていうか、

そっちの方がいい！つていう子どもが増えていくらしいが、実際そうなつてみると案外ツライ。

「そうだ！学校でなにがあつたら、パパがすぐに助けるから（わざわざ強調しなくとも、この3日であなたが私の“パパ”だつてことはわかりましたから！つーか、助けるつてどうやつてだよ・。）

と、私は心中で毒づきながらも曖昧な返事をした。“パパ”は得意げだった。

「じゃあ、行つてきます・・・・。

「はいはーい。いつてらっしゃい 頑張れよ 」

私の学校は有名な進学校で生徒は様々な地域から学校に通う。電車やバスを使い、長い人で片道3時間かかつたりする。まあ、私もそのうちの一人なのだが。いつも、学校の最寄駅で親友のマナと約束している。たまに、家が近くにあるオタケが家まで迎えに来てくれるので一緒に行つたりするが、今日は見当たらなかつた。

よく考えてみると、私はこの人の実の娘じゃない。いくら自分が愛した人の娘でもここまで父親らしく振舞うものだろうか・・・。疑問が残る。いわば、私はあの人にとって異性の他人だ。年も近いし。私だつてそれなりの意識はするし、もしかしたら・・・つて思うときだつてあるのにあの人は何もわかつていない。つていうか、たかが16歳の小姑娘にそんなこと心配されても、あの人人が可哀想なかもしれない・・・。せつかく優しく接してくれてると。これからは唯一の家族になるんだし・・・。私は途端にひどい罪悪感に見舞われた。。

「うん・・・これからはもつと親子らしく接してもいいかもしねない!ううん、それがダメならあの人のことはお兄ちゃんって思えばいいわけだし」

私は一人で喋つてゐるのを承知で大きな声を出して弁解した。言わ  
ずにはいられなかつたからだ。でも、その後、私が街中で一人訝し  
げな視線を他方から向けられたのは言うまでもないだろう・・・。

電池時計の電子音が鳴り響く。だが、この家の主は微動だにしない。ずっとソファーに座つたままだ。

「さてと、ちいも学校に行つたことだし、俺も本職に戻りますか。つていうか、まさか俺がパパになるとはねえ。運命つてどう転ぶかわかったもんんじゃないな、ま、ちいちゃん可愛いからいいけどね

“せいい”かおり夕々に楽しめそ二、たな

男は不敵な笑いを浮かべた。・・。

## パパは紳士（後書き）

こんには。初めまして！やつと次話投稿の仕方を理解した口生です。まだまだ未熟な点ばかりなので、もしよろしければ、改善すべきところを書いていただけたら嬉しいです！宜しくお願ひします。

「おはよう、サー。」

「あ、おはよう、マナ。」

「今日から、学校来れるようになつたんだ、よかつたね。」

「うん。」

「やっぱり、サー顔色悪いよ？大丈夫？」

「あ～、これは大丈夫。なんか、お母さんの再婚相手がすごく苦手で・・・。」

「そういえば、サー、お母さんが再婚するのメッチャ反対してたもんね～。で、そいつ、サーになにしてくんの？いつも、元気しか取り柄の無いような、サーをここまで追い詰めるんだから、相当なことしてくるんでしょ？」

「元気しか取り柄が無いっていうのは余計だよ！う～ん、別に何をしてくるってわけじゃないんだけど、っていうか、逆にメッチャ紳士で対応に困るんだよね～。」

「え～。紳士なの？ならいいじゃん。あたしはてっきり、嫌味なおっさんかなって思つたから。」

（それがよくないから、こ～うやって疲れてるんだよ～。。。）

でも、さすがにキアヌ・リーブスも恐れをなす美貌を持つた21歳の人があ母さんの再婚相手で、ましてや、一緒に住んでいるなんて口が裂けても言えない。大親友のマナにでも！

「あ～、そうかも。」

「ホントに霸王がないなあ～。あ！オタケだ！オタケ！おはよ～！

！」

「お～。おはよ～。あれ？サック元気ないだや？」

『だや』って語尾につけるのはオタケが動搖した時の癖だ。ちなみに、私のことをサックと呼ぶのには何かポリシーがあるらしく、なかなか変えてはくれない。サーかサックのどちらかにしてくれ！！

「ほら！オタケも同じこと言つてゐる。ね、サー？保健室行つた方がいいんぢやないの？」

「……うーん、行つてこようかな。」「めん、マナ。先生に連絡しといて。じゃあ。」

私は特にしんどかったわけではないが、色々と考えることが多すぎたため、保健室で寝ながら考へることにして、1年3組の靴が並ぶ棚の前でマナ達に別れを言い、保健室に向かつた。

「ねえ、オタケ～いいの？保健室まで、サー連れて行かなくて。」  
マナは口調を少し落ち着けた。

「？」

オタケの方はさも分からぬといつた感じだ。

「まあ、あんたらはオトボケコンビだからね～。まあいこか、あんたが気付くまでは多めにみてあげる。」

「あつそ、そりやどーも。」

「つていうか、オタケあんた態度変わりすぎ……。」

「勝手に言つとけば？」

「ええ、言つときますよ。もつとあんたらを刺激する出来事が起こればいいのにね～。」

「……。」

(やつぱり、同居自体がヤバイのでは？？)

一度決めたことにもう一度耳を傾けるのは案外面倒くさい。  
そんな疑問をうつりちらりと眠りかかっている私に何度も問い合わせていたところ、急に走る足音が聞こえた。何度も。

さすがに変だな、と思った私が見上げた先にあつたものは、オタケの顔だつた。

「――――！」

「なんだよ。そんなに驚かなくてもいいだろ？せつかくいい一コ一  
ス持ってきたのに。」

「何? いいニユースつて?」

「それは・・・あ！ほら、あそこ。見えるだろ？あの人だよ、い

レポート

あの人たよと言われても視力か0・5の私には見えない。あんたは

「あ、近づいてるー！じゃあ、俺

「どうしておまえは、おまえのやうな人間が、おまえのやうなことを、おまえのやうなふうに思ふんだ？」

才タ

オタケはそんな私を置いて自分のクラスへと戻つて行つた。だいたい、オタケはなんのためにここまで来たのだろう。オタケはナゾすぎる・・・。まあいや、とにかく寝ながら考えよう。昨日も色々考えすぎてあんまり寝れなかつた。

ノツノツ・・・ノツ

足音が私のベッドの前で止まりた（妙な気がした）。

「ダメじゃないか、ズル休みは。」

そのセリフの持ち主は私の肩を撫でながら言った。この声はもしゃ！でも、あの人は今仕事のはずだし。他人の空似だ！

h  
—

「しぬばくて、思わず声をあげてしまった。

(つづけた!)

時すでに遅した

なんだ、起きてるんじゃないかな。

ミシ・・・

「俺は、仮病は認めないぞ。」

ベッドには体重が加わった音がした。

声が近い。頬に息があたる。きっと顔のそばで言っているんだ。

「仕方ない。俺も昨日は全然寝てないから、添い寝してアゲル」

布団の中に空気が入る。枕にも、重みがかかる。

「こ、困ります！！！」

私は布団を跳ね除けて抗議した。目を横に向けるとそのまま・・・・・・いた。

「！」「！」

「えへ、なんで困るの?だって、俺達親子だろ?」

「！？？？」

「まあ、これからは仮病も出来ないって思つたほうがいいよ?」

「！？？？」

「驚くのも無理ないと思つけど、朝言つてたでしょ?俺。」

「！？？？」

「ほり、『学校でなにかあつたら、パパがすぐに助けるから』つ

て。」

「！？？？」

「まだわかつてなさげだな~。」

「！？？？」

「いいかい?ちい。まだ、俺の職業を教えてなかつたね。実はパパ

今日からこの学校の保健医なんだ。」

「！？？？」

名前：一瀬 明雪 本名がどうかわからない。

年齢：21歳

性格：優しくて紳士的 とてもパパには思えない。

容姿：キアヌ・リーブスも恐れをなす美貌

好きな食べ物：コーヒー牛乳プリン

職業：私の学校の保健医

たつた今、新たな情報が“パパ”プロフィールに刻まれた・・・。

## パパ情報追加（後書き）

こんには。今日は友達も出演させてみました。まだまだ、前半中の前半なので、どうか、次話までお待ちください。宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2156a/>

---

すべてが初めてだった。。

2010年10月28日04時36分発行